

日系アメリカ二世文学の発展について

— 羅府新報を通じて —

The Progress of The Japanese American's Literature by Second Generation
— From Rafu Shinpo —

山本茂美

Shigemi YAMAMOTO

はじめに

筆者は長年日系アメリカ人の文学について研究してきた中で、日系アメリカ文学の背景には、日系人を対象にした日系新聞での文学作品が深く関係しているのではないかと考え、2006年、2007年と続けてアメリカ合衆国の日系アメリカ人のために出版された有名な『トパーズタイムズ』、『ユタ日報』の中から研究を進めてきた。^(注1)日系アメリカ文学の中には、必ずといっていいほど、一世、二世の体験談が組み込まれている。しかし、日系アメリカ文学が注目され始めた頃、一世、二世の人々は、強制収容所に入るという不名誉な体験を恥じるあまりに、決して周りの人たちに自分の体験も思いも語らなくなっていた。そこで、注目したのは、自分達の思いを素直に表現していた日系人のための新聞だった。先に述べたこの二つの新聞は、第二次世界大戦注の強制収容所での情報提供に使われたり、また移民当時から出版されていたが終戦後様々な事情で廃刊されたりしたものである。

そこで、今回は、現在もロサンゼルスで出版されている羅府新報の中から、近年の日系作品の背景になる作品がないか研究を進めることにした。ロサンゼルスの日系アメリカ博

物館で紹介された、『羅府新報』のマイクロフィルムだが、現在第二次世界大戦前後の羅府新報を調べるためには、国会図書館のマイクロフィルムを閲覧するしか手段が無い。大変時間のかかる作業だが、筆者は、二つの観点からこの羅府新報を研究することにした。2009年に出版される愛知学院の文学部の紀要の中でこのようにいくつかの作品を研究していくうちに、作品の中に二世の部という欄が多くあることに気づいた。そこで今回は、二世による日系アメリカ文学とはアメリカ合衆国の中でどのような存在であり、どのような作品をどのような作者によって書かれ、更に羅府新報の中では、二世の作品がどのような形で発表されているのかを研究しようと考えた。

現在羅府新報を1951年初めの新聞まで調べを進めているが、まだ日系人の文学作品とはっきりいえるものは見られない。俳句や短歌などが大半である。しかし、ある日系アメリカ文学の研究者によると、アメリカ合衆国の中で書かれた日本語の俳句、短歌は立派な日系アメリカ文学だという見解もある。この点では今回研究対象とした1948年から1951年の作品は、日本語のものも立派な日系アメリカ文学といえるかもしれない。

1 日系アメリカ人二世文学について

一世から二世への交代は、日本国籍のままの外国人の一世から、国籍を取得した世代への移行を意味するという。この日系二世が文学作品を書き始めたのは、第二次世界大戦前のことである。しかし彼らの作品が多く作られるようになったのは、第二次世界大戦中の強制収容所でのことである。収容所では、文学愛好者にとって活動の足がかりになり読書会やサークル活動が盛んになり冊子の発刊につながったという。

ここで強制収容所時代に書かれた小説の一部を紹介したい。

「灰色の墓地」 水戸川光男

…お父さんの希望通り、お骨を日本に持っています。という妻の一言に、こんなにも狼狽せねばならない自分が不思議でならない。家族を捨ててまで故郷の墓地でねむりたいという気持ちが私の真底にあるわけではない。それは作りごとである。いかにもそれを讚美するかの如くみせかけているにすぎない。死後私がそっくり日本送りになる可能性はまずないという壁を自ら作り、それに向かって抵抗を続ける、という一種の遊戯に浮身をやつしていたのである。その壁が妻によってあっさり取り除かれると、私は忽ち抵抗の目標を失い、脆くも自分自身をも失ってしまった。

私は、目を閉じて、もう一度瓶山平野の見渡せる先祖の墓地を頭に描いた。かつては、こっそりとした色彩豊かな油絵のような光景で私の脳裏を占領していたはずなのに、今、抵抗の目標を失った私の目の前に現われてくる丘の上は、黒褐色を塗りつぶした異様な風景である。次第に墓地が灰色につつまれてくると、木枯らしが吹き始めた。動けなくなった私を、そっと地上におろすと、妻と娘は立ち去っていく。待ってくれ、と叫んだつもり

だが、言葉にはならない。また、木枯らしが吹く……。

この作品は、「南加文芸」という1965年にロスで結成された機関紙の中に掲載されている。^(注2)この作品でもわかるように当時の二世たちの作品のテーマは日系移民の運命が主となり事故のアイデンティティー、二重国籍の問題、大和魂、天皇制、親子関係、ゼネレーションギャップ、マイノリティーの自覚、第二次世界大戦中の強制収容所での体験であった。

しかし、ワシントンDCの戦時移転局WRA 年一月二十日全強制収容所の閉鎖を発表して直ちに日系人の解放に着手し、仲間が集まる手段がなくなりこの活動は、幕を下ろした。

その後、戦時中活躍した、442部隊による合衆国に対する犠牲的な献身、日系人に対する、社会の贖罪問、排日土地法の廃止、市民権の獲得などさまざまな要因がほどよく幸いして日系社会は元気を取り戻して安定していた。

このような状況の中で、かつての文学愛好者が、少しずつ復活したコミュニティーの邦字新聞や邦字雑誌さらには英字新聞、英字雑誌などに投稿するようになってきた。彼らの作品は、英字に変わっていったが中には日本語に固執した作品も多くみられた。このような理由から今回は羅府新報の中の作品を考察していきたい。

2 羅府新報について

さて、研究をすすめる中で、『羅府新報』について紹介しておきたい。

海外バイリンガル日刊紙最大といわれる『羅府新報』は、カリフォルニア州ロサンゼルス市で発行されている有料新聞である。現在の発行部数は、15,000部ほどで、日本語版

英語版があるが、購読者は7割である日本語版のほうが多い。読者は南カリフォルニア、更に全米にまたがるだけではなく、日本や他の国に在住する購読者もいるという。表紙は、右側のページから縦書きで始まるので右綴じ方式で、英語版は、左のページから横書き左綴じの構成になっている。

さて、この『羅府新報』は1903年（明治36年）4月、移民の山口正治、渋谷清次郎、飯島敬一郎の3人がアメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルスのリトルトウキョウで創刊された。羅府は、漢字読みでロサンゼルスという意味である。最初は、週2回250部数からスタートした羅府新報は、1904年に日露戦争が始まると、400部を突破し、山口氏らは合資会社を組織し、美人投票などの企画で読者を獲得したという。

1907年には、経営者が飯野陣内、野沢宏、中村正平、戸田弘定の四人に移り、編集部と工場の区別をつけるなど新聞らしい体裁を備えた日刊紙になった。1901年1月1日には『羅府年鑑』第一号が発行され15年まで続いた。その後1938年から1941年まで続いた。

1910年ライバル紙『羅府毎日新報』の台頭や銀行融資が難しくなるなど多くの困難に直面するが州銀行監督官により競売にかけられ、菅野正雄が1335ドルで落札。猪瀬伊之助、井上昌、駒井豊策らが株主になった。

羅府新報の基盤が安定したのは、1922年に駒井豊策が社長になってからで、1926年には英文版を発行。2世をターゲットにした新聞作りに移行する。今回は、研究範囲から外れるが、この頃の内容は、人種差別、排日移民法通過、1930年代初期の経済恐慌、日米関係の悪化など、困難な社会、国際状況の内容を伝えている。この頃の新聞には、文学的要素はなかなか見られない。こうして羅府新報は第二次世界大戦が勃発し、日系人の強制立ち

退きが発令するまで新聞は、発行され続けた。

1946年1月1日に復刊。政治的危険があると思なされた多くの日系人同様に豊策が収容所から開放されなかったため、長男の明が社長に就任した。しかし、排日感情は、まだとても強かったため銀行からの融資は難しかったという。しかし、再刊の反響は大きく、購読や高校の依頼が殺到し、日系人のために収容所から帰った後にどこに住むかどんな仕事をするかの情報提供や行方不明になっている友人知人の消息を確かめる手段として大いに役立つようになった。今回の研究対象の詩や短歌、俳句の投稿や小説の記載も見られるようになっていく。1948年には毎日新聞欧米部長の高田市太郎と駒井氏が出会うことで毎日新聞の記事が転載されるようになり日本の記事も豊富に伝えることができるようになった。現在は、AP通信や、日本の時事通信、共同通信とも契約し更に充実した内容になっている。^(注2)

さて先に述べたように本研究においては、1946年に再刊された後の1948年から1951年までの新聞書面のなかでどのような日系二世の文学作品が掲載され、日系文学発展のきっかけになっていったか、またいつから日系アメリカ文学として英文による小説が掲載されていくかを調べていく。

3 羅府新報の作品について

－1948年の作品について－

先にのべたように、『羅府新報』でもこの時代から二世の短歌という掲載があらわれる。ここでその作品の一部を紹介したい。

5月26日

日輪はややに昇りて金色に 輝く雪の目に
沈む海上

大森勝子

ゆけどゆけどコーンの畑のみ アメリカの

ポートルステートときくアイオワは
山下日米親

この作品の最後に次のような文章がある。

「二世有志の希望により、短歌界を設けました。入会希望者はお申し込みください。」
このような広告の後、二世の作品の部が紙面に多くみられるようになった。

6月23日

いつの日か汝に抱かれむ別れ楽し 林明る
き故郷の村

宮城貞子

一尺の壺のうちにも距離ありて 輝き一匹
の燐光にぶし

大森勝子

この作品でもわかるように、一世と違い、なかなか日本人の中に生きる情感が伝わらないように感じるが、日本の文化を継承するという点で日系社会には大きな意味を持っていたのであろう。

1949年の作品

この年に特に注目したいのは、懸賞小説の掲載である。前年度に募集されたこの懸賞小説に多くの作品が投稿された。その中で一等から三等までの作品が掲載されている。この作品が一世のものか二世のものなのか残念ながら確かめる資料が残されていない。そこで、ここでは、作品名と作者だけ紹介することにしたい。

一等入選	間引き	坂本 桂
二等入選	二つの芽生	芥川達郎
	陽炎	藤田 晃
三等入選	敗戦国の乙女	

これらの作品は新聞紙面半分か四分の一の短編小説だが、小説が紙面に掲載されたのは、

この年が初めてであることを考えると、大きな進展と考えられるだろう。やはり日本語の小説ではあるが、この先少しずつ文学作品が生み出される貴重な一歩である。

さて、1948年の紙面で紹介したようにこの年も多くの二世の短歌が紹介されている。

8月31日

母の日にささぐるものなければと 厨に
水汲む我が男童は

大森勝子

わが汗の結晶けふはトラックに 香りも高
し初荷のサルリ

山下日米親

この二人は、1948年にも多くの作品を投稿している。ここから、彼らのような歌人が日系社会で見られるようになったことを証明している。

羅府に着きぬと弾む弟の声とまた 我を訪
ねひ来る笑顔を思ふ

溝口真純

帰米して初の一人の旅なれば さまざまの
思ひ心暗くす

笹本千鶴子

この二つの作品は二世の当時の立場を現した対照的な作品といえよう。新たな環境に力強く立ち向かう姿と過去を経験が心を重くする作者の心情は当時の姿勢の代表的な心情であろう。

9月28日

この日の作品は8月31日の作者とほぼ同じ人物による。しかし注目したいのは、その作品の内容である。少しずつ心情表現がうまくなっていくのがわかる。

見馴れては黒さ目立たず天候に 征服さる
る人間の色

大森勝子

よちよちと這ひゆく吾子をひきはなし ス
トロローラーは歩道を走る

押山富士子

叱られて我に泣き寄る白人の子を 誘ひ出
づ夕日を見むと

笹本千鶴子

最後の作品には大きな意味があると考え
る。白人の子供が日系人にすがり助けを求
めているという内容が、少しずつ日系人の
立場を変えたことだけでなく二世が堂々
の対等に生きる姿を見せたいという強い
意志を感じる。

さらに10月26日には、二世の短歌以外
にも詩の掲載がある。

秋雨

アルハンブラ 大友陽一

雨の舗道が 真っ黒く
ニューロードのようなその道を
アイスクリームの車が静かに走った
悲しい鈴の音を残して
冷たい雨 秋の雨
ベリーツリーの真っ赤なその枝に
小鳥一羽 雨に濡れている
可愛い羽根を神経的にふるわせて

夕べを告げる鐘の音が
静かなアベニューを縫うように
パサデナの森に消えていった
淡い感傷的な余韻を残して
故郷の雨 異国の雨

郷愁を誘うかの様に私の胸に
貴方の名は一と問ひかけた
私の名は Alhambra Bill

寂しい雨 秋の雨
ポタット

一つ

庭のクルミが落ちた

我々が日本で鑑賞する詩に比べると理解が
難しい表現も多くみられるが、日系二世の間
でも文学に関わる人が増え、その中で日本の
伝統も学ぶということがその後の日系社会に
大きな影響を与えている。

この年の新聞の中でさらにこの年からは、
Holiday Issue という日曜版が月に一回程度
発刊されるようになりこの中には、次のよう
な作品も見られるようになった。

The Nurse

by Brownie N.Furutani

The angle of mercy...the women in
white

Who nurse the suffering, day and
night;

Humble hands that wash humanity's
feet

In silent prayer when crisis they meet;
The weary vigil they keep till dawn

To conquer death with the light of
worn

The newborn baby, they tenderly raise
As if their own, with a mother's praise;

Angels of mercy...that soothe mankind's
pain

Can sing a lullaby in sunshine or rain.

No glory, no

Reward for their endless toil

In temples of life and death and bloody
soil;

"The Lady with the Lamp" that light
the darkness...
To your broods, I give my thanks of
gratefulness

But worry not-for we shall care
For all those you loved so dear,
Cause our hearts shall always be
With you-ever so near.

1950年の作品

この年にもHoliday Issue という新聞が発行され、同じような英文による作品掲載されている。

さらにこのような作品も掲載されている。

By Ruth Kodama

PILGRIM'S DREAM

My Hero Comes Home
From distant foreign soil
Where so gallantly you gave your life,
You've come home long last
With not blare of drum nor fife.
To rest among friends of old
On land once so well you knew
As child, boy and man,
Years seemed all too few.
Rest, my hero, rest in peace,
For tired and weary you must be
From that long and arduous journey
O'er land and across the sea.
Your mom 'n dad, sis 'n bud,
Khaki clad buddies, old and new,
Have come to bid you
Their last adieu.
Sleep, my lad, sleep in peace,
The tree above shall watch o'er you
The sky shall be your eternal roof
Not always so clear, but forever true.
They gave your mother the Stars and Stripes
That once kept vigil over you,
She held it close to her worn out heart
And tears fell like the morning dew.

Like he sturdy mountain reaching for
the sky
Stands a pilgrim with his head held
high,
His eyes upon a dream he sought
Of a citizen's rights in the land his
hands helped wrought.

With his noble heart and cherished
hopes, he came
From the land of cherry blossom fame
Where beyond the blue Pacific stood
The adventurous shores, from tales of
his boyhood,
In this strange and enchanted land
This stalwart pilgrim placed his hands,
And toiled with skin and sweat and
tears
With yawning daybreak into the setting
of the years,
There stands a cross on foreign field
The blood he gave, his only yield,
There stands the church, the press, the
community,
The symbols he leaves for which he
crossed the sea.

This bended body still staunch the' years
have dimmed his sight,
Bronze face with creases deep covered
with snowy white,
But heart like steel to conquer a favored
dream

As a citizen in his country, his home,
under the flag that gleams.

Old Glory, watch over him.

His face, his only sin.

-RUTH KODAMA

December 11, 1950

第二次世界大戦前の記事から1950年にかけて調べた羅府新報の中で、このような作品が見られたの1947年以降のHoliday Issue ができてからでその後折々に英字の詩が見られるようになった。二世を中心とした文学活動のあらわれと推測される。

さらに1950年の作品では、「子供の欄」があり、「言葉の遊び」という見出しの中に羅府第一学園の生徒たちが、「俳句とは、五七五だ」と聞いて思い思いに作ったものが掲載されている。

瀧本文子

おかしいよ 子猫や子犬 とびまわる

森本香代子

1 山に出かけ 栗をとったら とげがたつ

2 つぼみはな きれいに咲くよ パッと咲く

3 いじわるこ またけんかをし ないている

瀧口 健

うちの犬 猫をおいかけ おこられる

佐々木貞昭

かねがなる またべんきょうと ひとりごと

夕涼み いすの下から 蛇が出る

オチサチエ

1 わるふざけ また先生に おこられた

2 さくらさけ きれいにさけば ひとつやる

これらの作品は、五七五の文字にあてはめることの楽しさが先に来ているかもしれないが、この作品を通じて確実に二世達の中に俳句という日本の文化が受け継がれている。この先どのようにアメリカの文学に受け継がれていったかはまだ多くの考察が必要であるが、大きな手がかりになったことは、間違いないと思われる。

さらに4月29日には児童作文が掲載されている。

ダイイチガクネン

一ネン ヨコミ チツ

オバアサン

ワタシノオバアサンハ モウ70ニナルニデス。マイニチガッコウカラカエルト ゴチソウヲシテ マッテイマス。イツモオバアサンガワカイトキノオハナシヲシテクダサイマス。ワカイトキニハ ハワイデシゴトヲサレマシタ。オバアサンハ ナツニナッタラ フレスノニイッテ フユニハコチラヘキマス。ワタクシノオバアサンハヤサシイカタデス。

この作品は、日系三世のものである。そこですべてがカタカナである。しかし、こうして多くの世代の作品が新聞紙上に掲載されるようになり、さらに文学に対する活動が盛んになるきっかけになったと推測される。又、

正しく使われている事で、日本語教育への熱心さもわかる。

この後にも先に紹介した作家たちの作品が折々に登場する。

10月7日

山下 日米観

メキシカンが目尻を下げてよく話す セニヨリタは娘の意味とし知りぬ

物取ると腰上げし時片方の 足の痺れにどつと倒れつ

道家 英子

用事など無きが如くに汽車は過ぐ 灯影乏しき野邊の小澤

州境を二つ夜のまに超えしかば 熊野の山川すがたを変へぬ

溝口 眞純

何もかもいやになりたれば體力を 強いて働く痴呆の如く

かくならむ我が境涯に目覚むれば むしろたふとき試煉と侍む

來栖 幸一郎

歌を詠み管繁などを聞き得れば 病床六尺の我が世も楽し

気胸待つとめの視線にとまどへば 我が椅子車押され初めぬ

樋口 千里

ブドウエイの灯影も親し勤めをば 終えて安らぐ宵の電車に

世相今ただならぬ時一瞬を 治むる人の心や如何に

佐倉 しのぶ

夏を澄む水の涼しさ我が前の ボートの腹に水紋揺らぐ

母上の首にかけたるネツカチーフ 娘の如く若さの匂ふ

岩脇 英信

病院の木立に佇ちし夜もありき みとりくれける君を慕ひて

たそがれの海に向ひて君の名を 呼べと答へず潮のい鳴

また、二世の詩も紹介されるようになった。

11月25日

傷心

岩脇 英信

私は二十二なのと顔染めて はにかむ君の瞳美し

愛懸に年の隔ては無きものと 言へば泣きけり今宵の君は

肉親の愛をも知らず来しゆゑか 君に甘ゆるこのわびしさは

黄昏のパークの小道気にかかる 君が心を想ひつつゆく

A院の日の近づけば歌を詠み 君と語るもあと幾日か

熱去りてややこころよし聊は 安き思ひにてすしをば待つ

このように様々な形の文芸作品が年を追うごとに増えていく。

1951年の作品

今回は51年初めまでの新聞しか調べることができず、この後掲載されることになる英字

の文芸作品にはたどり着くことができなかつた。二世の短歌や俳句は当社はたどたどしい内容であった作品も日を追うごとに詩情があふれていく。この後英字による小説などがたくさん出版されるまでの大きなプロセツであると考え。そこで今回は最後に1951年の作品を一つ紹介することで終わりたい。

6月8日

高柳沙水選

二世の部

山下 日米観

雪の嶺を越ゆれば車窓にひらけ來ぬ バーレー芽をふく大野さ青に
農夫我も時に遅れじホルモンを 苗に用ふる世としもなりて

阿部 さつき

爪紅く染めし女生徒らほしいままに はしやぎつづく朝の電車に
世に知れぬ歌のいくつを詠みて終る 命と思へど敢へて嘆かず

山本 愛子

風邪に臥す吾子は度々我を呼び行けば 用無しと笑顔にて言ふ
語りつつ佳境に入ればおのづから 英語に甦る吾子の話は

溝口 眞純

年々に五月來れば空爆に ※を焼かれし彼の日を想ふ
焼跡に家建つる日のあてどなき 苦闘つづきて我は
友一人職を解かれて誰も皆 怯えし如く話題つくるふ

角 素子

久々にあてなきサンデー丹念に ペニシアンプラインド拭き終へにけり
をとめらの荒みしさまの見難くて 日本の映画なかばにて去る

來栖 幸一郎

イースターけふさへ訪ひ來し 人稀に山の療院しづかに昏る
病友の話題は書いて八人の 息ひそかなり午後のひととき

岩脇 英信

霞曳く汀に垂るる糸柳 揺れつつ光る春浅き日に
我泣けば共に泣けどもけふの日の 女子は彼の日の女子にあらず

澤田 精風

かばかりのはやり風邪をと輕んじし 悔しきなり病み臥せりつ

終わりに

羅府新報を調べ始めたのは、近年の日系アメリカ文学を研究する中で、どの作品にもやはり日系一世のモチーフが入っていることに注目してのことだった。日系アメリカ人の歴史を研究していた頃あまりにもこの時代の資料が少なく、いかに日系一世が沈黙を守り生きていたかがうかがい知れた。それだけに、『羅府新報』を調べていく時、このように、たくさん自分の気持ちを表した詩や作品が掲載されていることに驚きも感じた。しかし、まだまだ小説のような文学作品が現れるには、多くの月日を待たなければならないようである。

当初考えていたより多くの収容所を出た後の作品が多くみられ、この視点における研究は思いのほかたくさん作品の紹介することができた。その中で少しずつ二世の作品の参加を呼び掛ける広告を多く見るようになった。そこで最初は一世の作品に注目したが今回はこの二世の作品に視点を移してみた。

今回の作品は、当初考えていた二世の英文文学作品の掲載の前段階として大きな意味を持っていると考える。もちろん今回は英字の

詩などの紹介もできた。二世の文学者の存在も確認できるようになってきた。今後折々に、国会図書館に足を運びさらにマイクロフィルムを起こし、貴重な作品を見つけていきたい。そして、文学作品としての分析だけでなく、当時の日系アメリカ人の歴史研究にも役立てて行きたい。

注

紹介した作品は、マイクロフィルムをおこしたもののなので字が不明の箇所もあるが、そのまま紹介している。

- 1) この内容は、愛知学院紀要, 32号, 33号, 並びに金城学院大学論集, 人文科学編, 第3巻第二号, 並びに4巻第二号で詳しく述べている。
- 2) この内容は、愛知学院紀要34号にも述べられている。

Work Cited

- 1) 羅府新報, 1946年—1947年, マイクロフィルム, 国会図書館。
- 2) 愛知学院紀要, 34号 2009年。

Work Consulted

- 1 藤沢全, 「日系文学研究」, 大学教育社, 1985, 東京。
- 2 上坂冬子, 「ユタ日報のおばあちゃん, 寺澤国子」, 瑞雲舎, 2004, 東京。
- 3 黒川省三, 『アメリカの日系人』, 教育社, 東京, 1979。
- 4 鶴田真, 『日系アメリカ人』, 講談社現代新書, 東京, 1971。
- 5 村上由見子, 『アジア系アメリカ人』, 中央公論社, 1971。
- 6 若槻康雄, 『排日の歴史』, 中央公論社, 東京, 1971